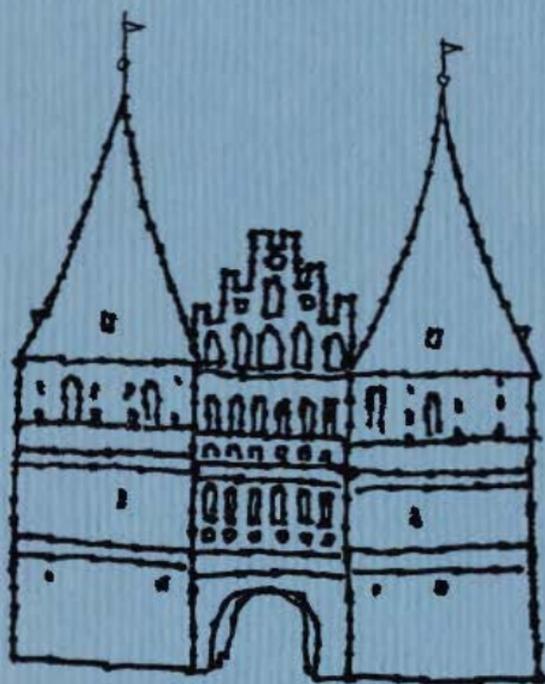


# ECHO

1



DAAD友の会

カット 東山魁夷 (1933-1935年留学生)

## 原体験

大橋秀雄

DAAD 1956 年組の 10 人の同期生の大半は、既に船で出発していた。当時石川島重工業の社員だった私は、残っていた中嶋唯夫医師と一緒に 10 月 20 日の SAS で羽田から慌しく飛立った。入国を予定していた Frankfurt 空港は霧のため閉鎖され、小雨降る夜の Hamburg 空港に下された。南廻り 48 時間にわたった長い空の旅を終えて、ようやくドイツの土を踏むことが出来た。

突然の変更で途方にくれ、中嶋氏と一緒にハンブルグ総領事館に電話をかける。動かずに待っているようにとのこと、やがて黒っぽいコートに身を包んだ品のよいカップルが現われ、ショファー付きのベンツに我々を乗せた。人っ子ひとり通らない、濡れた落ち葉が街灯に淡く浮かび上がる静かな街並みを、車は滑るように走り抜けてやがて総領事館に到着した。徳永総領事御夫妻であった。留学生の心得につき、短い訓辞を賜わる。「身持ちに気を付けなさい」の一言が、なぜかいつまでも耳に残っている。近くの Pension を紹介して頂き、かくして留学第一日が暮れていった。

DAAD の奨学金を 10 個月延長してもらい、58 年 8 月末帰国の途につく。この間、Braunschweig の工科大学で、H. Schlichting 教授に師事して流体力学の研究に従事し、帰国直前に Dr.-Ing. の口頭試問まで済ませることが出来た。公表印刷論文の提出を待って、翌 59 年に正式な学位記が送られてきた。

歳月の重みは、その物理的長さで測れるものではない。2 年弱の留学体験が、私のその後の人生に如何に大きな意味を持ったか、年

をとるに従ってその思いを益々深くするばかりである。その体験を、このような短い紙面でお伝えするのは到底不可能なので、がらりと立場を変えた話題に移りたいと思う。

現在私は、東京大学工学部の国際交流委員長として 300 人程の留学生の世話役をやっている。約半数が中国や韓国などの漢字圏から、3/4 がアジア圏、北米やヨーロッパの先進工業国からは 15% 以下となっている。日本自身が研究対象となる学問分野とは異なり、我々自然科学の分野では、留学生を世界中から引きつけるために、それなりの魅力を備えていなければならない。文部省が毎年新規に受け入れる 1500 人を超える国費留学生は、世界最高の奨学金(大学院生で月額 17 万円余)と、一たん修士または博士課程の正規の学生となれば、修了まで殆ど確実に延長が認められる有利な条件に恵まれている。

このような好条件でも、欧米先進諸国から優秀な留学生を引きつけるのは中々に難しい。とりわけアメリカやフランスなどに比べて、ドイツからの留学生が少ないことは、常々気に懸かっている事である。日本語の障壁、学術水準の世界的評価、独特な教育方法(放置主義)などの一般的なマイナス要因に加えて、ドイツに対してはもう一つの問題がある。それは大学卒業の年齢が高すぎることだと思う。ドイツの学生の大半は、卒業時には 20 代の後半に入っており、家族持ちも多く、留学という冒険をするには束縛が大き過ぎる年代に入ってしまったのではないだろうか。ドイツ派の一員として、このような問題をどうにか乗り切って、日独の留学生交流を一層発展させたいと願っている。

留学生を迎える立場になっても、自分の原体験がその基本にあって、有難いと感じたこと、感激したことを、そのままこちらからしてあげたいと考えてしまう。二三の具体例を挙げて御紹介しよう。

1) 優しい先生より厳しい先生。ドイツ人の学生と区別せずに、厳しく要求され、叱られたことの有難な味が後になるほどよく分かってくる。そう言えば、運よく留学生試験に受かったのも、駒場のドイツ語で常木実先生の講義が厳しかったお陰である。

2) 日本語の勉強に同情しない。日本語を勉強しても後で全く役に立たないかもしれない。しかし、日本語でしか分からない新しい世界が開けることは、人間の巾を広げるのに必ずプラスになる筈である。丁度ドイツ語が自分を豊かにしてくれたように。

3) 小さな親切。駅まで出迎えに来てくれた研究所のG助手（現教授）、道順から習慣に至るまで、こまごまと教えてくれた無数の人々。不安を和らげる小さな親切は、いくらあっても多すぎることはない。

（おおし ひでお、工学、1956/58 Braunschweig、東京大学）